

## 海外中国人/華人コミュニティの変容

[研究計画・目的] 20世紀前半の第一次世界大戦、同中頃の共産主義革命、後半の改革開放政策など、中国国内および国際情勢の変化によって、繰り返す波のごとく発生した中国からの移民。異なる時期に異なる地域から渡航した人々とその子孫が、どのようなコミュニティを築いてきたかをパリでのフィールドワークを中心に調査、記述する。

[研究活動] フランス国立図書館フランソワ・ミッテラン館、リヨン中法大学歴史記念館における文献資料の調査と、パリ13区、パリ3区、ベルヴィル地区の3か所のチャイナタウンにおけるフィールドワーク、関係者に対するインタビューなどの組み合わせで行なった。

### [研究成果]

パリ13区に属し、セヌ川に隣接するフランス国立図書館フランソワ・ミッテラン館は、ピラミッドを思わせる巨大な建築物であり、その最下部が研究用フロアになっている。外国人研究者も利用可能で、2025年4月の渡航早々に1年間の研究者用パスを入手し、その後毎週定期的に通って資料の読み込みを行なった。

研究対象であるフランスにおける中国人の存在については、同館に17世紀に遡る関係資料が所蔵されている。反宗教改革の一環としてアジアへ布教に出かけたカトリックの宣教師らが、帰国する際に信者となった中国人を助手や通訳として帯同するとともに、中国や日本の文物をもたらし、いわゆるシノワズリ（中国趣味）やのちのジャポニズム誕生につながった。当時の宣教師たちは外交使節を兼ね、清朝の皇帝とフランス国王の間を取り結んだので、清朝の康熙帝が送った4000冊をはじめとする大量の漢籍がフランス王室の所蔵品となり、現在は国立図書館の蔵書として保存されている。

当時から20世紀前半まで長期に渡って流行したシノワズリの実情を知るという意味では、パリにあるルーブル美術館、オルセー美術館や、多数の画家・彫刻家・音楽家・文学者らのアトリエ、自宅、あるいはセブル国立窯業所などで多くの実物を観察したことが大いに理解を助けた。その影響範囲の広さは想像を超えるものだった。

清朝がのちに宣教師による布教を禁止したことで中仏の直接交流は一旦途絶えるが、その後フランスがスペイン、ポルトガルやイギリス、オランダに続いて海外に展開した植民地のひとつが現在のベトナムだった。1885年の清仏戦争で、フランスは歴史的に中国の影響下にあったベトナムを植民地とした。それは、10年後の日清戦争で、同様に中国の影響下にあった朝鮮を日本が奪ったのと相似形をなす出来事だった。

同じインドシナ半島のカンボジア、ラオスを含めた「仏領インドシナ」統治は、太平洋戦争中の日本による占領をまたいで70年に及んだ。その地域に19世紀以降、人口増加および日本を含む列強による侵略に悩む華南から大勢の人々が移住し、植民統治者の代理人的

な地位を現地社会に築いたのである。

フランスに中国人/華人が初めて大量に移り住んだのは、1975年、アメリカがベトナム戦争に敗れ、ドミノ効果でベトナム、カンボジア、ラオス3国でほぼ同時に共産党政権が誕生したことを契機とした。民族的にも階級的にも共産党政権による弾圧を受けやすい立場にあった人々が、「ボートピープル」として命からがら海を渡ったことは大きな国際ニュースとなった。フランスで初めてのチャイナタウン（あるいはカルチュアアジアティーク）となった13区「ショワジー・トライアングル」が、そうした「インドシナ難民」によって形成されたことは、これまでも度々語られている。

ところが、今回、国立図書館で、当時の難民たちが中国語で書き残した手記を読み続けるうちに、「ショワジー・トライアングル」における真の主人公は、ベトナムから来た「ボートピープル」よりも、むしろ映画『キリング・フィールド』にも描かれたクメール・ルージュの極左政策を生き延びたカンボジア華人だったことが明白になった。一次資料としては、パリ華僑倶楽部が発行していた隔週刊の「簡訊」、二次資料としてはフランスで中国語書籍の刊行を続けてきた巴黎太平洋通出版社（édition pacifica）刊の『印支華人滄桑歲月：Les Vicissitudes des Chinois en Indochine』などが大いに参考になった。

もちろん、当事者や近い人々にとって、同エリアではカンボジア華人の母語である潮州語が最も通用度の高い言語であることは当初から自明の事実であった。しかしながら、いくつかの理由により、その事実が明確に書き記され、伝承されてきたわけではなかったのだ。

第一に、国連機関による難民認定を受けるにあたり、「カンボジアから脱出せざるを得ないカンボジア国籍保持者」であることが大前提あるいは有利な条件になると考えられたこと。第二に、クメール・ルージュが鎖国的政策をとったことで、海外にその凄惨な事態が伝わるのに時間を要したこと。また、第三に、カンボジア華人のうち少なからぬ人々が、1975年以前、中国共産党の指示による活動に従事していたが、クメール・ルージュの勝利後、両国共産党の間に齟齬が生じ、現地華人はカンボジア側からすれば「好ましくない外国人」となったにも関わらず、中国共産党側は、当初はクメール・ルージュの政策を支持していたために、のちには影響力を保持する目的のために、現地華人を救出しようとはしなかったことである。結果的に、近年「ショワジー・トライアングル」で調査研究を続けている中国系研究者ですら、同チャイナタウンの第一世代を（ベトナムから来た）「ボートピープル」と総称するような事態が起きている。カンボジア華人は徒歩でタイ国境を越えた場合が多い上に、クメール・ルージュが施行した原始共産制のため、個人資産を金の延べ棒などの形で持ち出すことはできず、総体として「ボートピープル」というプロファイル化にはなじまない。

こうした背景を踏まえ、今回の研究はパリ・チャイナタウンの潮州系カンボジア華人に的を絞り、第一世代の潮州→カンボジア、第二世代のカンボジア→フランスという移民史に加え、フランスで生まれ育った第3世代の生育史および現状を調査することが必要との結論に至った。具体的には一家族の経験を当事者へのインタビューを交えて書き出すこととし、その対象として1980年パリ生まれの映画監督杜来順氏に話を聞いた。

杜来順氏は長編アニメ作品の第一作『FUNAN』で実母がクメール・ルージュ時代のカンボジアで経験したことを描き、第二作『陳さんの森』では中国広東省潮州地区で代々生活してきた一族が、19世紀から21世紀にかけて、いかにして海外移住の選択（および残留の選択）をしたかを描いている。彼は父母の母語である潮州語を自らも第一言語として身につけ、学校ではフランス語による教育を受け、なおかつ出自への強い思いから標準中国語でのコミュニケーション能力も獲得／維持している点で、言語学的にも大変興味深い存在である。

研究テーマに直接関わるのは中国系の移民だが、フランス社会における彼らの地位を考える上で、同国の伝統的移民政策理念である「共和国モデル」についても正確に理解する必要があったため、上記のルーブル、オルセー両美術館以外に、パリの移民史博物館、ギメ美術館、ケブランリー美術館、セルネスキ美術館などでオリент、東洋、アジアへの視線について思索を続けた。その過程でフランス語における「オリент」がおそらくは元々の意味を保持しているがゆえに、今日英語で使われる「オリエンタル」とは異なる方向を指していることに気づいた。

また現地にも身を置き、初めて実感できたこととして、チャイナタウンの発生が必然的な自然現象などではなく、歴史的、政治経済的、社会的に、しばしば偶然の要素により生じる事象であるように、ある地域で一時は隆盛したチャイナタウンが、のちには衰微し、滅びることもあるのだということが身に迫って感じられた。また、13区チャイナタウンのインドシナ難民とは別の流れで、1980年代以降、経済移民として渡仏した温州人のコミュニティを観察することで、「そもそもチャイナタウンとは何か」という問いの答えが必ずしも自明ではないことにも気付かされた。

#### [研究成果、今後の展望、教育への効果]

前掲の杜来順氏へのインタビューを中心とした論文「パリ13区チャイナタウンの半世紀--潮州カンボジア系フランス人映画監督杜来順の軌跡」を明治大学教養論集2026年第1号に寄せたほか、今回の在外研究中に得たさまざまな気づきを研究ノート「フランスの中国人」として同号に発表した。また、近年多くの移民労働者を受け入れている台湾の中国語ウェブマガジン『独立評論@天下』に、杜来順監督のインタビュー

(<https://opinion.cw.com.tw/blog/profile/501/article/16747>) および西ヨーロッパ最大の華人系企業であるタンフレールの創業者家族についての文章

(<https://opinion.cw.com.tw/blog/profile/501/article/16990>) を寄せた（いずれも新井一二三名義）。今後もパリチャイナタウンの変化について引き続き観察していきたいと考えている。

教育への効果という意味では、これまでも拙著『中国語は楽しい—華語から世界を眺める』に記したように、中国語は中華人民共和国だけで使われる言語ではなく、世界各地に伝播した国際的な言語であることをパリにおいても観察し得たことを学生たちに広く伝えていきたい。また担当する総合文化ゼミナール『映画で学ぶ日本とアジア』では、これまでもシ

ンガポール華人やマレーシア人監督による映画作品を取り扱って来たが、今後はそこにカンボジア華人を両親とするフランス人杜来順監督の作品も加えていく。最後に、このような貴重な機会を与えていただいた明治大学に深く感謝して在外研究報告の結びとしたい。